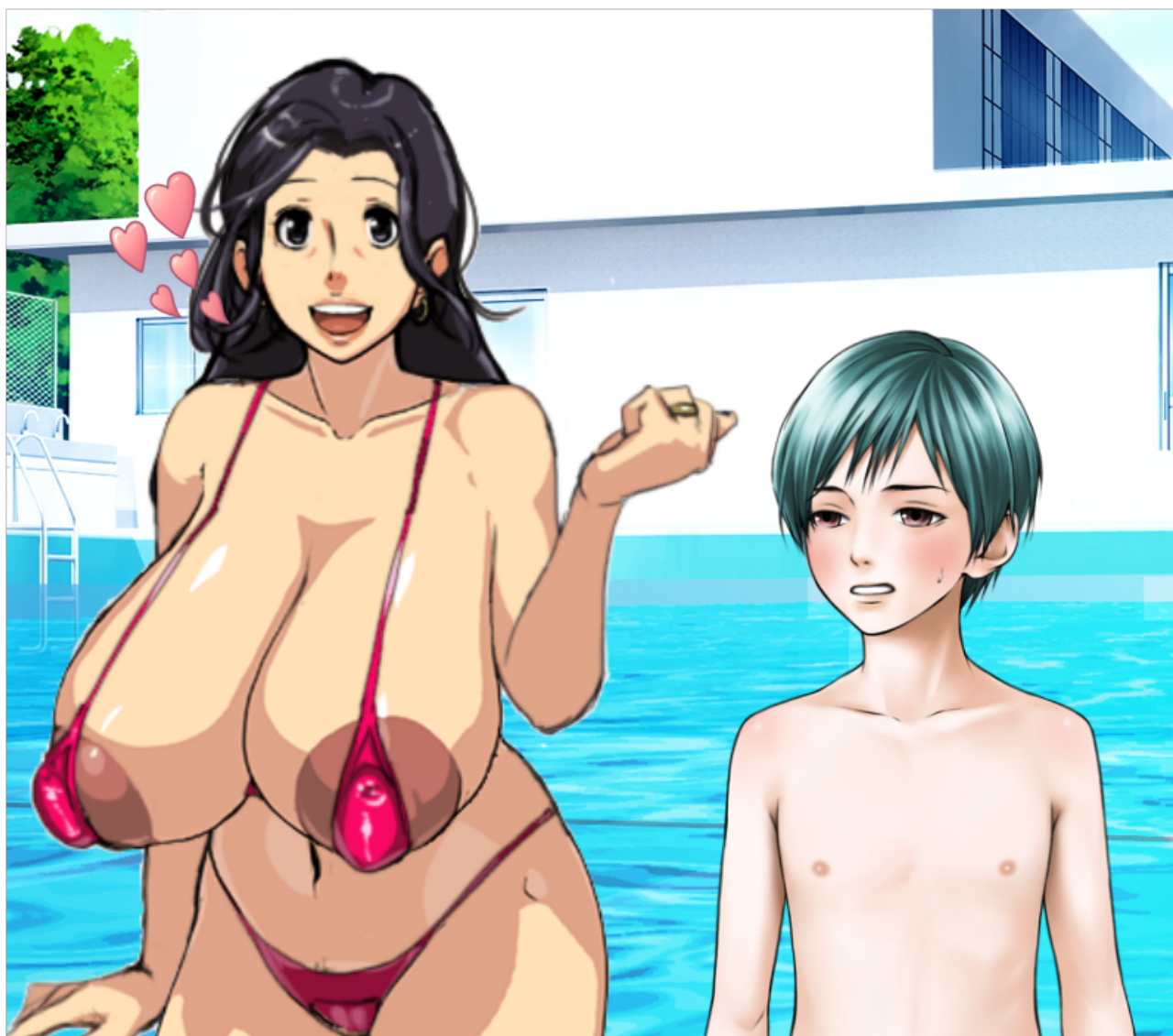


淡い恋より熟女の体！

清純口りに恋をする巨根シヨタを
爆乳熟女が逆レイプ、
大人の魅力でばっちりゲット！



うさぎロボ 著

1章 爆乳熟女が巨根ショタのプール覗きに気づきつつ水着を脱いでみせる

プール付きの家。

近所に住む少年、上田一夫にとっては、生まれたときから存在している、山や河と同じような存在の家。

別に大きいからではない、どんな家でも、子供にとっては「元から存在しているもの」だ。

だから、特に興味も持たない。



プール付きの家。
近所に住む少年、上田一夫にとっては、
生まれたときから存在している、山や河と同じような存在の家。
一夫は、一人のかわいらしい少女と一緒に歩いていた。
何だかんだがんばって話しているが、特に盛り上がらない。

一夫は、一人のかわいらしい少女と一緒に歩いていた。

何だかんだがんばって話しているが、特に盛り上がらない。

途中で少女に電話が掛かってくる。

もちろん、携帯ぐらい持っている現在の少女。

「ごめん、用事出来たから先に帰るね」

そういつて、走って帰ってしまう少女。

少し離れて話した少女だが、ある程度一夫にも聞こえていた。

「田中の奴……」

田中くん、と少女は小声で言っていた。そして、話を聞いて笑っていた。

一夫と違い、面白いことが言える男だった、クラスメイトの田中は。

正直、両天秤に掛けられている。

面白い田中に対して、クラスの中では結構顔がいい一夫。

今走って帰った少女、恵子は二人のそこそこいいとされる男子を両天秤に掛けていた。

そうできるからには、もちろん美少女である。

それだけではなく、気が強く口も回る。

怖いもの無しのクラスの中心的存在だ。

ため息をつく一夫。

「恵子ちゃん……」

はっきり認めたがらないが、一夫は彼女のことが好きだった。

そして相手も、多少見た目のいい一夫のことを憎からず思っている。

同時に、人気者の田中のことも。

ぜひ自分が選ばれたい、と思っている一夫。

しかしどうアプローチしたものか、まったくわからない。

そして、誰か……**経験豊富な熟女にでも女の扱いを教わりたい**、などとは思えない幼い少年である。

ただ、黙っていて思いが通じないかと、**奇跡待ち**をする乙女のような少年だった。

と、一夫の足が止まる。

横の、プールがある家。

それを囲む高い塀の一部が崩れていた。

ちょうど電信柱の影で、見つかりにくい場所だ。

「これ、入れるかも」

子供である、好奇心が強い。

入っている所でさらに崩れたら危ない、などと考えもせずに穴に入る。

大人では通れないが、一夫は何とか通り抜ける。

バサリ、と黒髪をかきあげる女。

三十少しで、若いといえば若い、若い女性というには違和感がある。

熟女のなかではもっとも若い部類、といえるだろう。

——うわ……

木の陰から、熟女を覗く少年、一夫。

まだ低学年、S年ぐらいだろう、まさしくショタというべき年齢層。

唾を飲みながら、熟女を凝視していた。

熟女は水着姿である。

巨大すぎるほどの乳房をほとんど乳首と股間だけ隠すような細い水着で包んでいる。

——お、オッパイ超大きい……

息が熱くなる。

股間が突っ張る。

まだS年だが、股間は大人並。いや、並の大人の巨根を超えていた。

むしろ同学年でも華奢な上田一夫の股間に装備するには大げさすぎる巨柱である。

それがパンツとスパッツを突き破るほどの勢いでテントを作っていた。

それを握ることもまだ知らない一夫である。

木に手をつく。

ザワ、と木が音を鳴らす。

初めてではない。

先ほど入ってきてすぐに、音を鳴らしていた。

そのとき、熟女、望月美紗は心臓が止まるほど驚いた。

この家は、夫が単身赴任中なので彼女しか住んでいない。

プール付きの豪邸で、壁も高く、人が入れるはずがない。

が、古い家なので、実は壁に穴が開いていた。

それに気づいた一夫が好奇心のままに入ってきたのだ。

——強盗？ 変質者？

それとなく、音のするほうを見る美紗。

見ると、木の影に何かがいる。

それが子供だと気づくと、ほっと息をついた。

——よかった。

おかしい相手ではないようだ。

子供だから、というだけの思い込みだが、別に間違っていない。一夫はただの近所の子供なのだ。

良く考えれば、美紗は見たことがある気もした

あまり近所づきあいをしないので正確には思い出せなかったが。

ともかく、心配することはないようだと思う。

が、それならどうすべきなのか。

考えてみれば、良く分からない。

勝手に出て行くならそれでいい。

とりあえず保留して、泳ぐのを再開した。

が、帰らない。

再びプールサイドに上がったときも、まだ同じ場所にいた。

——困ったわね。

思いつつ、ふといたずら心を起こす。

「疲れたわ」

椅子に掛けておいたタオルに近付き、手に取る。

髪を拭きつつ、歩く。

プールの周りというか、庭には多くの木が植えられている。

その中の一つ、一夫が隠れている木の方に歩きつつ、タオルを頭に、紐ビキニの上に手をやる。

「はうう」

思わず声を出し、口を押さえる一夫。

ブルルルルン、と本当に音が鳴っているように感じるほどの躍動を見せつつ、バレーボールのような熟女の雌肉とその大きさにつりあう相当巨大なピンクの突起物が露になる。

——あの子声出してたわ。かわいいわね。

わざとブルンブルンとバレーボールを揺さぶってそれを拭く。

爆乳を見せてからかうだけのつもりだったが、近付いてみると一夫の顔も良く見えた。

——結構かわいいわね。反応もいいし。

もう少しからかってやろうかと思う。

何気ない感じで木に近付いていく。

逃げるに逃げられず、しゃがみこむしかない一夫。

そのま近くによりつつ、気づかない振りの美紗。

——アレで隠れてるつもりかしら。

そちらを見てはいないが、横目で確認することはできる。

息が聞こえてくる。

「下も拭かないとね」

子供相手ということで、大胆になる美紗。

ビキニの下を脱いで、一夫に背を向ける。



ビキニの下を脱いで、一夫に背を向ける。
そしてタオルを落とす。

「あっと」

ぐい、と股間とまるまるとした肉付きの良過ぎる桃肉を後ろに突き出す。

「ひいいっ！」

大人の雌穴を目の前に突き出されて、動揺しないショタもいないだろう。

そしてタオルを落とす。

「あっと」

ぐい、と股間とまるまるとした肉付きの良過ぎる桃肉を後ろに突き出す。

「ひいいっ！」

大人の雌穴を目の前に突き出されて、動揺しないショタもいないだろう。

「あらあ？ 誰かいるの？ 大丈夫よ、お姉さんしかいないから。出てきなさい」

美紗しかいなければ大丈夫、という理屈は知っている美紗にも良く分からない。

だが、安心させるような優しい声音に、逃げ場もない一夫は素直に出てくる。

「あ、あの……」

「うふふ、君近所の子……」

と、余裕を持って話始め、目を見張る。

「ちょ、大きい」

「え？」

まだギン立ちの巨柱がスパッツを突き上げている。

それも、ある程度位置を直したものの、パンツに押しえられてのことだ。

フルに立ち切れる状態ではない。それでも、かなりの男性経験を持つ美紗を驚かせる。

「うふふ、なんでもないわ。それよりプール見に来たのね？」

「え？ あ、そうです」

——おぼちゃんのオッパイ、とはいえないよ。っていうか、お、オッパイだけじゃなくて……

チラ、と背丈の差から、さほど距離がない女の部分に目をやる一夫。

プールから出たばかりなのでまだ湿っぽく、体温でうっすら湯気も立っている瑞々しい女の花園。

ピンクよりやや赤黒い花弁は熟女らしい経験深さを示しているかもしれないが、一夫にわかることではなかった。

——うふふ、見てるわね。デカチ○ポピンビンにして。

「お姉さん、望月美紗っていうの」

「お姉さん？」

「ん？」

ピク、と笑顔の頬を引きつらせる美紗。

「なになな？」

「いや……お姉さん、ですよ」

頬を引きつらせる一夫。

「ぼ、僕は上田一夫」

「一夫くんね。高校生くらいかな？」

「え？ なんで？」

そんな風に見えるわけがない、と驚く一夫。

と、指差す美紗。

股間を。

「だって君のそこ、大人みたいだもん。大きくて、男らしいわよね？」

「だって君のそこ、大人みたいだもん。大きくて、男らしいわよね？」
「そ、そんな、そんな……よくわからない」

「うふふ、君のそこ、おチンチ〇。」

大きくて立派よ」

「り、立派……」

大人の女にそういわれると、
不思議な誇らしさで

胸が一杯になる一夫。

その嬉しそうな恥ずかしそうな顔を見て、
美紗は思わず抱きしめたくなるが辛うじて留まる。



——やだ、なんてかわいい顔しちゃうの？

っていうかこの年でもやっぱりチンチ〇褒められたら嬉しいのね。



「そ、そんな、そんな……よくわからない」

「うふふ、君のそこ、おチンチ〇。大きくて立派よ」

「り、立派……」

大人の女にそういわれると、不思議な誇らしさで胸が一杯になる一夫。

その嬉しそうな恥ずかしそうな顔を見て、美紗は思わず抱きしめたくなるが辛うじて留まる。

——やだ、なんてかわいい顔しちゃうの？ 　っていうかこの年でもやっぱりチンチ〇褒められたら嬉しいのね。

一夫のよこに膝を突く、ブルンと揺れる女のバレーボール二つに目を釘付けにする一夫。

「ねえ、一夫くん、いい事教えてあげるわ」

声を潜める。

「男の子はね、チンチ〇が大きいほど偉いの」

「そんな……」

まじまじと見てくる一夫に微笑みかける美紗。

「皆まだ良くわかってないから、面白いこといえるとか、運動が出来るとかで偉さが決まるとか
思うけど……お姉さんみたいな大人の女の人は本当のことがわかってるのよ」

顔を真っ赤にする一夫。

——いいわねえ……でも「だから見せてよ☆」とはまだいえないわ。

逃げられてしまう。

逃げられずとも、嫌がられて無理矢理というのはまずい。

面倒な事になるのはかなわない。

逆に上手くやれば、一夫が頻繁に家にくることもありうると美紗は思う。

——腕の見せ所ね。

全身余すところなく見せつつとりあえず何からはじめるべきか考える。

——この子は反応からして、私と一緒にいるのを嫌がってない。というか、オッパイやおマ○コに興味津々ね。でも、「おマ○コ見る？」って聞いて、ついて来るかは微妙。自分を納得させるいい理由がないとね。

「プール見てたのよね？ 好きなの？」

「あ、そうです。泳ぐのが好きなんです」

「じゃあ、ちょっと泳いでいく？」

「いいんですか？ あ、でも……水着が」

「あら、私も裸じゃない？ お姉さんが裸なのに、男の子が恥ずかしがるなんて変じゃない？」

「そ、それじゃ僕も裸で泳ごうかな」

前かがみで歩き出す一夫、後ろからついていきつつ、歯を見せる美紗。

——よしよし、やっぱり嫌がってないわ。今の話の流れであっさり乗ってくるなんて、この子もエロ展開望んでるとしか思えないわね。

大まかにはその通りだった。

しかし熟女が望むものと、シヨタが望むものでは同じ「エロ展開」でも質が相当違うだろう。

その辺はもちろんわかっている美紗。

どうやってそれを埋めていくか考えつつ歩く。

体験版終わり

これから一夫は逆レイプされ、

熟女のエロさに引きずり込まれ、

まったく考え方の違う人間になっていきます。

続きは製品版でお楽しみください。